

中川根ふる里通信

= 第90号 =

中川根ふる里通信
昭和61年4月20日創刊
編集・発行・連絡先
静岡県榛原郡川根本町
TEL 0547 上長尾29-6
56-0045 FAX 56-0020

<http://furusatotsushin.yamanoha.com/>



石倉山北端より東地名、久野脇ふる里の山並



写真説明。(前側文章・後側絵地図山並)

手前より、昭和橋(地名・石風呂間)、表川原(大井川)
大森山—東地名地区—小森山
裏川原が少し見えて、久野脇地区、三津間裏山、宮ん原、
下長尾、梅島高山山間の山。その向こうに白羽山。

まるで「箱庭を見る様」な
山と川の風景です。
遠い昔、海の底から隆起
した山々、その昔川が流
れた跡の東地名地区、
自然の贈り物大切に。

写真提供 栗原秀春さん

残暑お見舞い申し上げます

国内外各地猛暑や大雨による大災害が続出しておりまして、自然界の威力のものすごさを感じるので、暑くはいいえ、ふる里周辺は、緑に囲まれ朝夕夜はすこしやすくなっております。皆様のところはいかがでしょうか。

前回号にて、川根茶産地の状況をお知らせしました。三十年ぶりの凍霜害や、春先低温にて、一番茶の収穫は大減収となり、生産者はもとより、茶商さんや農協にもお茶不足となり、茶産地経済は深刻な不況におちいつておりますが、何とか頑張っております。又、茶の芽がおくれて出ておりますが、茶を採む、茶工場は稼働せず、せつかくお茶の芽は、無残にも刈り落とされたり、放置されたり、残念ですが、これも、大型茶工場や農家の高齢化により生じた産物ではないでしょうか。この夏場になつて、ふる里の茶畑は美しい黄緑色に彩られ、ペットボトルの緑茶飲料は、飛ぶ様に売れています。

太平洋戦争後、六十五年の歳月が流れました。八月になると、ここ数年戦争をかえりみる報道が目立ちます。テレビの社会に及ぼす影響は大きなものがあります。二十年前から取り組んでもうえたら、世の中も変わっていったらうと、考えます。体験を語る人々は、あまりに高齢になり、豊かな生活はつらい思いを消してしまつてしまつた。ふる里通信でも、「満州移民」「戦艦陸奥の話」「海軍兵の体験」「シベリヤ抑留」「最善など載せました。が、寄稿された、辻野さん、藤田正義さん、諸田君平さん、松下隣一さん、そして中野幸逸さん、みなさんが、おおくなりになりました。今、想うに、載せてよかつた」と思っています。久々に、川根文芸に細田さんの寄稿を見つけて、皆さんにお届けしたいと思ひます。

「川根文芸」より

「さとうきびちゃん ありがとう」

——くみちゃんの夏休み——

細田洋司

くみちゃん、は小学校の一年生です。

夏休みにお父さん、お母さんといっしょに、沖繩の島へやってきました。眠のさめるような青い海と、青い空、そして、ほっかりと浮かんだ白い雲。沖繩は、そんな自然がいっぱいの島でした。そして何よりも驚いたのは、見渡す限り一面に栽培されている、さとうきび畑の広さでした。

「まあ、歌のとおりだわ」くみちゃんは、そう思いながら、さとうきび畑の中の道をトコトコと歩いていきます。

「ごわわ、ごわわ、ごわわ……」口をついて出たのは、学校で教えられた「さとうきびはたけ」の歌です。

「くみちゃん、沖繩へようこそ」どこからか声がしました。あれ、だれだろう。あたりを見回しましたが、だれもいません。さとうきびの葉が風を受けて静かに揺れています。

「さとうきびちゃん、の……」くみちゃんは、さう言いました。

「ええ、さうよ」と返事が、かえってきました。

「沖繩は美しい島でしょう」

「わたしは夏休みで、お父さんお母さんといっしょに本土からやってきたのよ」くみちゃんは、答えます。

「ええ、知っていますよ。ひいおじいちゃんのお墓参りでしょ」

「えっ、どうして知っているの」すると、こたえが返ってきました。

「くみちゃんのひいおじいちゃんは、兵隊さんで、この島を守

たのよ」

「戦争って……」くみちゃんも聞き返しました。

「それはね。くみちゃんのお父さんやお母さんの生まれる前のことにはなるけれど、日本とアメリカとの間で、大きな戦争があったの。そして、くみちゃんのひいおじいちゃんたちは、海の向こうから攻めてきたアメリカ軍といくさになり、その中で亡くなられたの」

「どうして戦争なんかしなの……」

「それは、くみちゃんももう少し大きくなって、歴史を勉強すると、だんだん判ってきますよ」

「そこで、お墓はどこ？」うしろの方から声がしました。

「糸満市の摩文仁というところに、平和祈念公園があるよ。そこには戦争で命を落とした大ぜいの兵隊さんや島の人たちをお祀りしてあるんだ。ひいおじいちゃんも、そこに祀られているよ」

「まじりきびさんたちは、昔のことをよく知っているのね……」

「ええそうよ。わたしたちは、おじいさん、おばあさんたちから、この戦争のことをくわしく聞かされて、いま一たからね」

この島は、静かで美しい島だったけれど、いくさが始まると、兵隊さんたちだけでなく、島の人たちも、わたしたちも、バインナップルさんも、海の中の赤いサングラスたちも、みんな爆弾や鉄砲の弾を受けて、命を落したり、大けがをしたり、大へんは目にあつたのよ……」

そうなんです。沖縄の島は、昭和二十年三月に、アメリカ軍の総攻撃を受け、同年六月、この島がアメリカ軍に制圧されるまで、猛烈な戦闘が続き、これによって、日本の軍人、軍属約九万人、沖縄の人たち約十五万人が命を落としました。攻め寄せたアメリカ軍も、戦死者は二万一千人、負傷者は三万

人にのぼったのでした。くみちゃんには、このことは、もう少し大きくならないと理解できません。

「わたしたちは、おじいさん、おばあさんたちから聞いたことを忘れないように、こうして、みなさんに伝えてきているのよ。仲間を殺らせた哀しみも忘れないためにもね……」風が吹いてきたのか、まじりきびたちの葉すれの音が大きくなりました。

「大へんは戦争だったのね」くみちゃんも聞いてきました。

「そうよ。わたしたちの歌の中にもあるでしょう。『あの日、父は、鉄の雨にうたれて死んだ……この哀しみは、今も消えない』とね。『鉄の雨』ということは、アメリカ軍の撃った砲弾や銃弾が、まるで雨が降るように激しかった、ということなの。くみちゃんのひいおじいちゃんやお仲間の兵隊さんたちも、これで亡くなられたの。島の人たちは、今でも、このいたましいできごとが忘れられないの……」くみちゃんも、ただただびくびくするばかりです。

「でもね、くみちゃん」すぐ横で音がしました。

「島の人たちも、そして、本土の人たちも、みんな哀しみを乗り越えて頑張ってきたの。おかげさまで、島も緑が戻り、今日を迎えることができたのよ。もうあのようなら、むごたらしい戦争など二度とおこさないうち、力を合わせていきたいと思います。くみちゃんも大きくなったら、お仲間といっしょに頑張ってください。まじりきびさんたちは、このことは、合合わせるのよ。うに、いっせいに、まじりきびと葉を揺らしますよ」

「まじりきびは、たけの歌は、本当にあったことなんだ。わたしは、ひいおじいちゃんも眠っている。この島にきて、ほんとうに良かった。お墓へ行ったら、戦争でたいへんだったね」と、ひいおじいちゃんに、すっかりお話を聞いてあげよう。そして、このことは、大きくなくても絶対に忘れないでいよう……」

くみちゃんには、自分の心にしつかり言い聞かせました。身体からだの中で、なにか、大きな熱いものが、動き出してきたような気がしました。

「ありがたう。さとうきびのみなさん、たいせつなお話を聞かせて下さって、ほんとうにありがたう。わたしは、このお話をいつまでも忘れません。そして、お父さん、お母さんにも、このことをしつかり伝えます。」くみちゃんは、両側のさとうきび畑に向って大きな声で叫ぶと、決のさへ一目散に駆け出しました。

くみちゃんが走っていくさとうきび畑の行く手には、沖縄の明るい空と、青い海の風景が待っていました。

＊ ＊ ＊

孫たちが幼稚園で「さとうきびはたけ」の歌を覚えてきまーた。無心に歌う孫たちに、この歌が訴えている戦争への憤り、戦死者に対する哀しみの想いを理解してほしいと望むことは、今はムリです。

でもこれから先、歴史を学んで、この歌の持つ本来の意味を理解する日が早くきてほしいと思っっています。そして戦争を憎み、戦争を阻止しようとする考えを持つおとなに育ってほしいと心から願っております。そんなことを考えながら、童話風の「物語」に挑戦してみました。

この中では、現存するアメリカ軍の基地のことは、敢て取り上げませんでした。物語の統一性を欠くと思えたからです。しかし、現実の沖縄は、六十余年の間、変わることもなき「基地の島」なのです。私たちはこれを「遠い島の話なのだ」と簡単に片づけてしまっってはならないと思っますね。

「ネコ(アメリカ)の許す範囲内では、ネズミ(沖縄県民)は遊べない……」これは沖縄返還協定が締結される以前にあるアメリカ高官が述べた言葉だということです。

昭和47年5月15日、沖縄は、アメリカの占領地から日本国へ戻る、いわゆる「祖国復帰」が実現しましたが、現状は、先のアメリカ高官の言葉の通り、依然としてアメリカ軍の軍用機と軍艦の騒音の絶えることのない「基地の島」なのであり、アメリカの沖縄使用についての姿勢は今も昔も、基本的には変わっていません。

私たちは、本土の静かな山崎の町で生活しており、軍事基地とは全く無縁の日常が、ごく当り前のこととなっっています。時には沖縄の人たちのことを思っやることが、同じ日本の民として、また、大切なことではないでしょうか。

「さとうきびはたけ」の歌は、当時の戦争のむごたらしさを伝えているだけではなく、今も続いている「基地の島、沖縄」の人たちの哀しみと憤りをも併せて訴えているのだと、私には思っえてなりません。

ただし、軍事基地の問題は、「日米安全保障条約」をはじめ、「日米地位協定」の締結による、日本とアメリカとの約束によることから成り立ってきていることであり、これに對して、単純な感情論や、感傷論を述べたところで解決できるものではありません。

つづまるところ、これは「沖縄」だけのことではなく、「この国」のあり方に関わる大きな問題でもあるからです。少し中途半端な表現かもしれませんが、私たちは、それらの条約の存在を視野に入れた上で、沖縄

の人たちが抱いているであろう。やり場のない涙を涙みと
ってあげることが必要だと思ふのです。

ちはみに私の家では、二人の叔父が戦死しております。

一人はレイテ島で、もう一人は沖繩で亡くなりました。お
そらく「鉄の雨」にうたれたのでしよう。

ですから「沖繩」は私にとって遠くて、しひに近い島
なのです。

平成 21 年 10 月 記

(註) 沖繩及び沖繩戦に関する資料と数値は、平凡社版
「百科事典」から引用しました。

編集室より

「川根文芸」第 89 号(平成 22 年 1 月発行)に
て、細田さんの「さとうきびさん、ありがとう」

しくみちあんの夏休みを拝見して、これは、ふる里通信
の皆さんにも届けたいと願ひ、細田さんにお聞きしたところ
心よく承諾して下さいます。

細田さんは、素晴らしい文章が書ける方、ふる里通信にも
何回も寄稿下さっております。

この二年、沖繩の米軍基地移転問題にゆれました。県
民に大きな期待を持たせた鳩山内閣は、総理が辞任し、現
内閣になってからは、アメリカとの約束を守る姿勢しか示され
ていない。国民全体が真剣になって取り組む時は、これから
との意気込みも、すつかり冷えてしまっています。どうすれ
ばいいのでしょうか。

「さとうきびはたけ」は、たしか、昭和四十年代、NHKで
作詩作品を応募して、歌い手さんがステージで発表する「みん
なの歌」で、森山良子さんが歌ったものだと思ひます。
それから、森山さんの持ち歌となり、今も皆さんに歌われ
ている反戦の名曲です。いつまでも歌い続けられてほしいです。

東京のかたすみから(五八)

テレビの始めから終わりまで

耳と旋律で世界制覇

渡邊 寛貞 夫

昭和三十年四月、新卒としてラジオ静岡に入社した。その
時初めて磁気テープ録音再生機を知る。当時公開録音とい
えば、この大型三十分テープ録音機と、デンスケという肩掛け五
分テープ録音機しかなく、ラジオ局の放送は、この二機種に
よって支えられていたと言えらる。いずれもソニー前身の東
京通信工業製品で、私の興味をひき、生涯の扶持となつた
のである。

十年前、東静岡駅前、石川知事の音頭で「グランシツ
プ」という芸能文化会館が完成し、こけらおとしが行わ
れた。静岡観光大使である大賀さんと共に、同じく大使の私
も招かれた。私の出身地、川根の駿河徳山からは「麓ノ舞」と
いう伝統芸能が演じられた。

続いて沼津出身の大賀さんの講演を聴く。彼は私と
同じ昭和五年生まれ、沼津中学から上野にある音楽学
校音楽科へ進む。

音楽をやるには自分の声を何度も聴き直さなくては
ならない。音楽科学生にとって、何度も聴き直さねば録音
再生機の出現が待たれてきた時のこと、それを満ちてくれ
る新兵器が品川の町工場「東京通信工業」で開発され
たとのニュースを知り、研究調査に行き、いろいろ注文を着け
たり、クレームしたりと言ひ。

帰る時、校長の井深大氏から、「この町工場で働いてほしい」と懇願され、熱心な勧誘を受ける。将来有望なバリトン歌手と目指していた大賀さんは、テープ製造部長として、製作・製造専門の技術会社に入社したのである。

東京オリビッツの年に三十四歳で取締役就任、東京通信工業を「ソニー」と社名変更した。CBSソニーを設立、アイドル歌手天地マリ、山口百恵を世に出し、世界トップの音楽プロダクションに躍進した。五十二歳の若さで社長となる。ハミリ・ビデオ・CDなど新製品を開発・発売業界の常識を打ち破ってCBSソニーを日本のレコード会社に育てるなど、フロンティアスピリッツ溢れる経営者であり続けた。

「神は助けるべきものを助ける」大賀天才に閃きがあったのか、世界に飛躍できる録音機の製作にも、性能・機能・音感アップのため、耳・聴力・発声などの天性の音楽の基礎を、ソニーのソフトウェア専業やブランド戦略に生かしてソニーという五線譜の上に「ソニーの旋律」を描いてきたのである。

世界的指揮者ヘルベルト・フォン・カラヤンも大賀さんの耳の良さと時代の先取りセンスを誰よりも信頼したという。カラヤンが死の直前に、大賀氏を邸宅に招き、デジタルビデオに関する助言を受けていたと言う。

静岡人は温室育ちで、温厚な人柄が多いといわれているが、彼にはスピリット精神が溢れ、逞しさと引き締まったものを感じさせた。

テレビを発明した高柳健次郎先生、オートバイの本因宗一郎さんら、浜松を代表する偉人の雰囲気・気概を連想させる面も感じさせる貴重な講演であった。

真面目な話、大賀さんが技術屋でなく、音楽家で素晴らしい耳・聴覚をお持ちになつていたからこそ、ソニーを世界に確固たるものにしたと見るのは、私だけだろうか。

先日のNHK技術公開で、「スーパーハイビジョン音楽の家庭再生」部門の研究リーダーの西田さんも、「大賀さんは聴力が抜群、耳がいいんですよ、遠うんですよ」と言われた。

電気電子の今世紀より感性の次世代を実現に向けたのだと、耳で世界制覇した静岡県出身の大賀さんに絶賛を禁じえない。

音楽堂のなかつた軽井沢に音楽堂を造る資金を軽井沢町に寄付したとされている。

二〇一〇年 六月 記



軽井沢大賀ホール

一 大賀典雄さんのこと

音楽活動の部

- 東京芸術大学音楽学部卒業
- 東京芸術大学専攻科修了
- ベルリン国立芸術大学音楽学部卒業
- 東京フィルハーモニー交響楽団会長・理事長
- 指揮者として、60歳を記念として、東京フィルを指揮し、これをきっかけに、世界中の名門オーケストラと共演した。中でもベルリンの壁跡地のポツダム広場に建設した、ソニーセンターの落成式典でベルリン・フィルハーモニー交響楽団を指揮し、ベートーベン交響曲第9演奏

特集 地名発電所 — 100年の軌跡

大井川で一番初めの発電所として、又近代産業の
パルプ製造工場の動力源として活躍して来た。地名発電
所がいよいよとりかわされることになりました。

今回、当通信にて、特集を組みました。内容は、

★ 地名発電所関係の歴史

★ 写真集

★ 寄稿 宮下浩之さん、酒井政一さん、藤本都子さん
とらべております。ゆづくりご覧下さい。

★ 東海紙料(株)地名発電所の歴史

時代は遠く明治の頃、当時の製紙業界は、破布(特に輸入)
から自給木材パルプへの転換を断行した事から、パルプから
製紙への生産二貫体制が出来上がった時期であった。

当時合名会社大倉組当主として、実業界に覇をなして
いた大倉喜八郎氏は、明治二十七年期するところあつて、酒井
忠傳男爵が所有していた駿河國守備郡井川村山林三千六
千町歩を、代金三万五千円で買ひ受けて大倉山林と呼称し、
経営に乗り出し、現在に続く井川山林が生まれました。

やがて、山林原料とする東海紙料の発足は明治四十二年で、
原本からパルプへ、更に製紙へと一貫操業にふみ切つた大倉
氏は、実力者の片りんを示す、「井川山林」「大井川水系」「島田工
場」という一連の総合構成の決意の導火線は、周智郡氣田
に玉子製紙水力発電所、電氣利用があつたのみも知れない、こう
して、東海紙料発起と大井川水力電氣起工が決定したのである。
南アルプス三千六百町歩の大森林資源の開拓と、一八〇キロに及ぶ
大河大井川水系を運材の途とし、加えるに、その動力源の母体
を、中流地名に水力発電を求め、東西交通幹線、東海道と大
井川との交点、島田の地に、製紙工場を設立する雄大にして

かつ緻密な計画は、実行に移されることとなる。

—— 東海パルプ(初)五十年史より抜粋

地名発電所について

◎ 東海紙料(株)

・ 創立 明治四十年十二月十九日

・ 資本金 一百万円

・ 目的 西洋紙原料ウッドパルプ製造販売

・ 重役 取締役社長大倉喜八郎、外四名、監査役二名

・ 本社 東京市京橋区槍屋町一番地

・ 工場 静岡県志太郡島田町

◎ 地名発電所関係

・ 経常費一ヶ年金一、二、〇〇〇円

★ 工事

地所二町歩買収、家屋移転料等支払金四、〇〇〇円

水路土木工事費七、〇〇〇円余

発電所起工、明治四十一年十月にして、四十三年一月二十日略

完成、四十三年五月三十日全部完成、八月十三日通信

省検査を経て使用認可

発電工事設計者工学士中原淳三、工事担当主任技術

者工学士日澤剛太郎

★ 工場と発電所との関係

志太郡島田町にある工場は、製紙原料ウッドパルプを製造

する。これに要する諸機械の原動力は、地名発電所よ

★ 水路

志太郡徳山村字塩郷に水路取入口を設け、大井川の

水流を導き、同村地名発電所に至る。
延長一、三三三間(二、四二六m)内開渠一、二六五間(二、三〇二m)
隧道六八間(二、三三六m)落差七〇尺(二、一〇二m)
水量、五〇〇立方尺、秒約一、四七秒

★発電所

発電機容量二、五〇〇kVAにして、発電機電圧二、二〇〇
ボルトを、変圧器により二五、〇〇〇ボルトに昇昇し、銅線によ
り、大井川河岸起伏、重畳せる間を奔る即ち、志太郡伊久
身村笹間渡―身成―渡島―久奈平―丹原―鍋島―
川口―大長村鶴岡―神空―相賀―伊太を経て島田町
変圧所に送電し、次で機械原動力として使用する。こ
の線路六里(二、三五六km)架空工、三相三線式二五、〇〇〇
ボルト、五〇サイクル一回線にして、線路はS.W.G四番を
用い、電線間隔四尺(一、二七m)三角形点位置に配列し
トランスポジションは六ヶ所なり、電線接続方法は、米國
クラークスリフト・ジョイントを用いる。

★電柱

電柱番号数五八一本、電柱間隔平均約二二間(四〇m)
電線線は、最下部送電線下方六尺(一、八二m)の所にて、
本柱に添加し、S.W.G 8番亜鉛状鉄線を用い、これ
をもって、島田工場と地名発電所間の通話に供す。

★機械場

水槽より水車に至る水圧鉄管長二一三尺(六四・五四m)
にして内径八尺七寸半(二、六五m)を二条据付ける
この価格一五、〇〇〇円余。水車はドイツ國「ノイト」水車
製造会社、ノイト・フロントナル・フランシスという型に

して一分間三七五回転、容量一、六〇〇馬力にして、二基
あり、この価格五〇、〇〇〇円余。発電機はドイツ國、
アルゲマイネ電気会社製、レボルビング・フィールド型で
水車直結にして容量一、二五〇キロボルトアンペア、最
高電圧二、二〇〇ボルトにして二基あり、この価格三六、
〇〇〇円余。変圧器四基、内一基は予備である。单相コ
ーア型、油入冷水循環装置四置付容量八〇〇キロボルトア
ンペア、電圧の二、二〇〇ボルトを二五、〇〇〇ボルトとす。
この価格二〇、〇〇〇円余。発電所内配電盤装置一
式に要した費用一三、〇〇〇円余。外に十トン移動起
重機一台を備える。この価格五、〇〇〇円余。
発電所建坪八三坪一合二勺(二、七四八m²)この建築
費は一七、〇〇〇円余。他に事務所一棟、合宿所一棟
あり。

— 志太郡徳山村地名誌より抜粋 —

その他の地名発電所に関する出来事

○明治三十二年五月二日、地名に製紙工場を建設する計画
が、志太郡より提出される。

○同年九月十日、大井川より分水して、水カ発電をする由の計
画書が提出される。

○明治三十九年十二月六日、久野脇川端より川倉を作り、免島を
まわして、地名裏川原へ導く計画書が提出される。

— この三件は不実行となるが、後に、大井川は、こちらを通る
ようになり、久野脇より堤防が伸び、川水が免島を回る—

○明治四十二年、徳山村塩郷より五立方尺、秒の取水許可を得、川倉
や堰をつくり、分水して、用水路を建設する。

○大正四年七月三十一日、免島護岸工事着手

- 大正五年一月二十四日、東海紙料水路土木工事、地名裏山提防地堀削
- 大正八年八月二十日、水路継続使用願提出、五ヶ年
- 大正十一年二月七日、水路改良の土木工事願提出
- この四件は全て実行、大正末期から、大井川の分水(取水)も、地名裏手から取水され、久野脇からの突堤、免島もまわり、本流が取水口に流れる工事、かきれ、使用願が終る十三年頃には、遠郷取水は終了したのではなかつたと思われ、水路改良にともしない、新取水、水利権はニトシ秒になつたのではなかつたと思ひます。
- 昭和三年四月二十日創立者大倉喜八郎氏死去。
- 昭和五年、笹間渡発電所着工。
- 昭和六年二月、笹間渡発電所運転開始、出力四、三〇〇KW、それにともしない、地名発電所は発電を中止、発電用機械は取りはずさか、どこかへ行くこととなる、より近代設備の笹間渡発電所は、水路を堅固にした事と、大まき落差、地名笹間渡間等水トミネルの取水口は、水路末の小森山麓とされ、より多くの水が流れた。
- 昭和十四年、より多くの電力が必要となり、地名発電所が再稼働を始める、発電量は一、〇〇〇KW、東北地方から機器が運ばれ、一基で稼働していた、水路への水も、ニ発電所用として、多量に流れ、発電のほか、農業用水、地域交流と、大躍進の地域となった。
- 昭和三十八年、大井川水利用総合計画がもち上がり、川口発電所、遠郷堤以下は、川面に水が流れにくくなる設計となり、笹間渡、地名発電所と、中電赤松発電所とが交換されることとなり、通常時地名の川原は水思川となつていった。
- 又、昭和三十四年、伊勢湾台風により、免島は流失した。
- 昭和三十六年、地名発電所は廃止された、途中休業期もあつたが、創業五十年、一会社の発電所は、自業の動力源のみならず、地名地区に電灯をいち早く灯らし、川根電力索道(藤枝、地名千頭)への電力供給の仕事もはつた。



地名発電所建設工事(明治42年)

水槽より水車に至る水圧鉄管長 213尺(64.54m)
 内径 8尺7寸(2.65m)、土木工事請負 大倉土木組
 発電工事設計者 工学士 中原淳三、総落差 70尺(21.2m)
 工事担当技術者 工学士 日澤剛太郎、水槽の落差不明
 小森山山月却を削つての工事、移転前のかやぶきの民家や、杉皮ぶきの屋根が見える。



★ 想い出のアルバム

大倉喜八郎氏(創立者)
 天保8年(1837)9月24日、越後の国北蒲郡新発田町に生まれる。
 18歳で江戸に出、奉公3年後に独立、31歳で銃砲商をはじめ武のお店通となる。戊辰戦争をくりぬけ、西南の役には、朝鮮大マギンと遭遇、朝鮮政務、58歳で、井川大山林を買ひ受け経営開発にのり出す、70歳にて、莫大の木材を活用して、製紙原料を作ろうと志す、自家発電と地名にする大70シテ外起業実行者



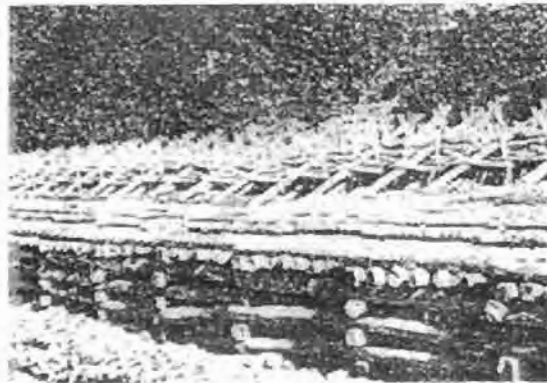
発電機横にて完成記念写真 中央 大倉氏

明治43年完成当時の写真 六枚



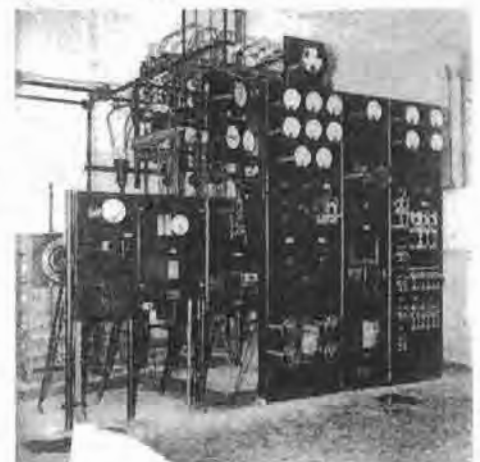
① 水車、ドイツ国ファクト水車製造会社製、
 フォイト・フロントルフランズ型 375 回転/分、容量
 1,600 馬力を 2 巻。

② 発電機、ドイツ国 アルプス 1 電力会社製、
 レーボルヒング フィールド型 水車直結 容量 1,250 KVA
 最高電圧 2,200V を 2 巻 ③ 変圧器 4 基 (1 基 71m)
 ④ 配電盤 装置一式 (写真下) ⑤ 発電所 建坪 93.12 坪

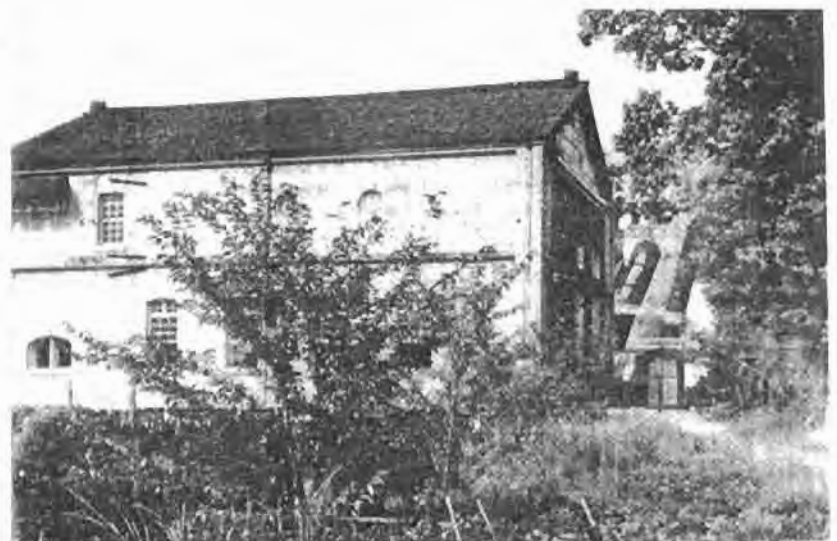


川倉について、塩郷取水口から分水
 された発電用水は、大井川の左岸端を通ず為
 堅固な川倉によって守られていたという。
 川石を敷きつめた上に木床、小舟を並べて、
 導水路を築き、通水させたということだ。
 しかし、洪水時の大井川の流れは、
 強く、渡々川倉は、破損したそうです。

「こぼれ話」塩郷の松島さんに、
 東海パルプの発電所取水口など
 教えていただいた時、取水口地点は通年、大井
 川の流れが寄せるところで、流量計測所、大岩
 を利用した取水トンネル計量所の地点と、川
 倉の建ちと壊れていて、見事だ、と話された。

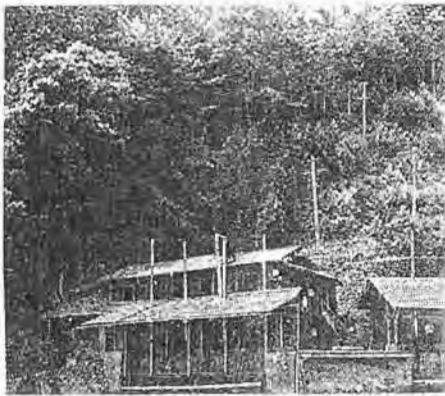


完成 近なる水路先端水圧鉄管取
 水口、北側より南側を写す。

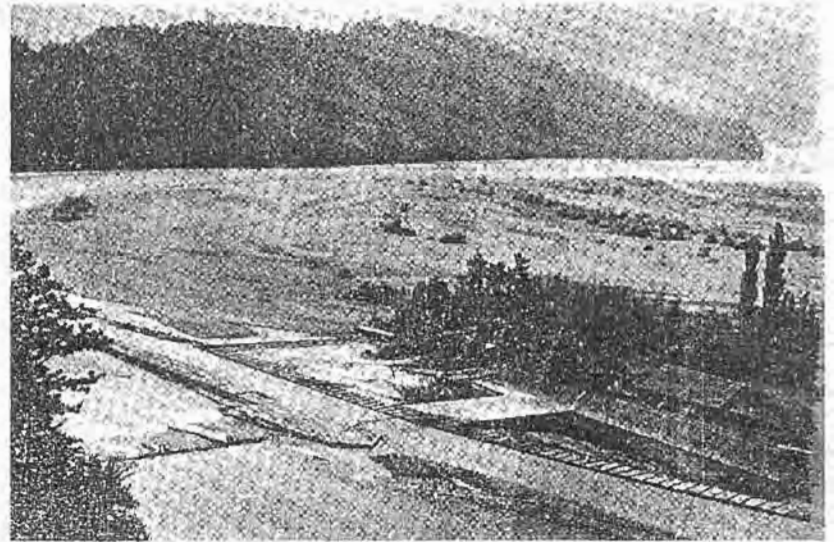


大井川水系最初の発電所は、近代産業の器械業と大森林・川水の利用と流域を潤した。

新たな電源開発の時代の写真
昭和初期頃 ~ 終了まで



大井川沿りの取水口。取水管理と並に
流下する舟や筏の通行の世帯として
川便がスムーズに行くよう、取りほからつた
という。昭和10年頃まで続いた大鉄紀
流しは、久野脇側と通ったという。



対岸久野脇から伸びた突堤と免節を回って池名裏川岸を通る
大井川の流路を固定するには、免節は重要な地点となり、改築所や
樹木も植えられた。写真左端には、取水口の設置され、新しい導水
トンネルも造られ、取水量も20/約となつた。



→ 水路も新工事によって、堅固とな
り、水量も増え、とうとうと浪水。
毎間渡発電所に導水された。



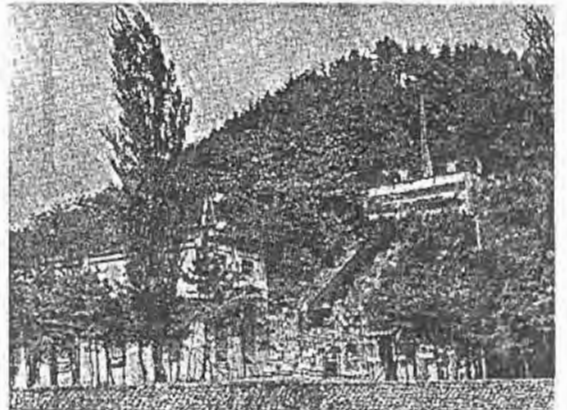
← 昭和27年頃から、再稼働し
た地名発電所、水圧鉄管は
一本となり、1000kWの発電を
始め、又発電音が周囲にひ
びいた。



→ 至咸十余年まで谷とあらわ
していた、毎間渡発電所取
水口。

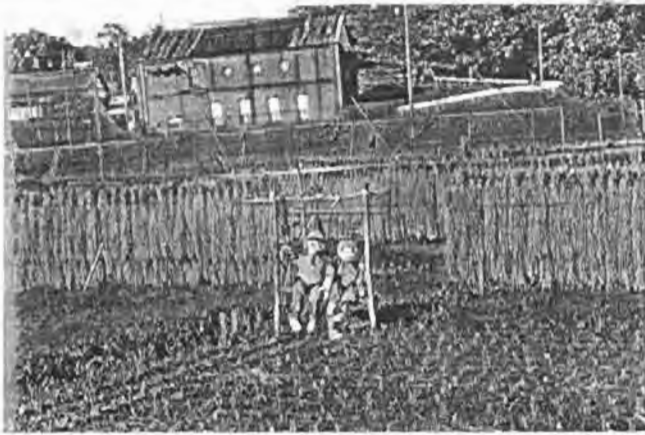


毎間渡発電所の写真二枚
石倉山尾先にあった、左右の写真
で、山の木や敷地内の木が時の
変化を表しているようだ。



穏かに余生をおくる発電所の写真
3枚 (写真提供 栗原香春さん)

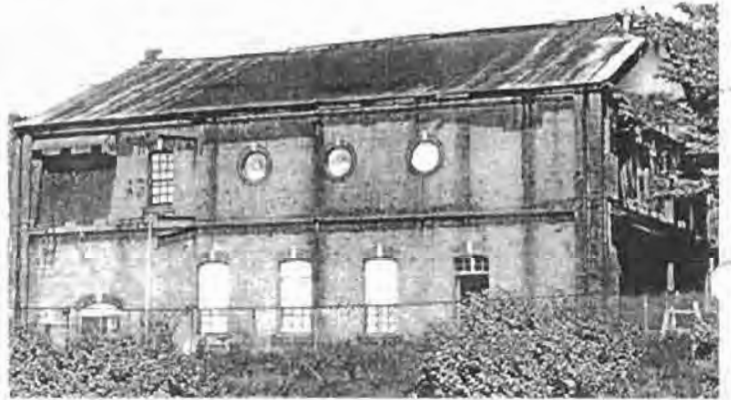
昭和30年頃の
地名発電所稼働中の写真(終業前)



さようなら、地名発電所、写真3枚

(写真提供、栗原香春さん)

- 右写真は、まさに屋根が取りこわされようとしている最後の1日だったところです。屋根右上に作業員の姿が見えます。
- 下の写真2枚は、左は中から東側入口方面を、右は北側壁面を写したものです。美しい小屋組も取りはずされて、その後、下がり込んだ。棟だけが残っております。今もしこの外壁は立っています。



地名発電所百年の来し方行く末

地名 宮下浩之

もう随分以前のことになるが、義母(亡妻の母)が地名に遊びに来ていた。絵を描く彼女が、スケッチに出かけてモチーフにしたのが旧地名発電所の建物であった。出来上がった絵の巧拙はともかくとして彼女の感性を揺さぶるほどの感動を与えたことは事実である。

日頃見慣れている風景だけに私には意外な驚きであった。

この発電所が建設されたのは明治四十三年(一九一〇)というから今年ちょうど百年目となる。この間ずっと地名の文化向上に貢献し、地名のランドマークであり続けた記念的建造物である。

発電の役割を終えて半世紀、廃屋として風雨に曝され数度の地震にも耐えてきたが、いよいよ耐え切れぬと判断せざるを得ないところまで来てしまった。

先般の地名区総会において窮状を説明し、危険回避のうえからも「取り壊しやせなし」の結論に至った。

そして去る五月解体業者に委託して、飛散の怖れのある屋根の鉄板を取り除いた。引き続きレンガ壁の解体に移ろうとした時、多くの人達から「何とか存続の方法を探すからしばらく待って欲しい」と強い要請があったので、解体業者にお願いで秋まで待ってもらっている。屋根を葺き替えるだけでも数千円、耐震補強には億単位の費用が必要となるので、容易な話ではない。

修理して活用したいと申し出てくださる企業もあるので、安全性と持続可能性を担保してくれるならば、良い方向で解決されるかもしれない。

平成四年九月、中部産業遺産研究九会によって歴史的価値について報告がされている。現在屋根をはずして明るくなった室内を見ると、これがほんとに百年前のデザインかと疑うほどモダンである。

日露戦争が終わって間もない頃、大井川鉄道が開通する二十年前にも前に想像を絶する文明の地名の地にもたらされたことは、なんと素晴らしいことであつたことか。

当時の先端技術を身につけた技術者たち、彼らのもつ都会的な生活様式など豊かな文化も持ち込まれ育まれてきたのである。

先人の偉業に感謝しつつも老朽化に抗しきれず退陣を余儀なくされる文明の残像に別れを告げざるをえないことになった。

当事者として残したい気持ちは誰より強く、その価値も十分に理解できるだけに、決別への苦衷は一方ならぬものがある。

近じか、「地名発電所を考えるシンポジウム」を開催してみんなが納得できる結論を得たいと考えている。

七月 十二日 記

法人格を持つ、地名区振興会 理事長